

【東アジア言語文化講座・後期】

◆科目名：韓国・朝鮮語表現論演習 b

Studies of Korean Expressions (seminar) b

◇副題：

◇概要：

この授業では、音響音声学の基礎について学びます。

This course introduces the foundations of acoustic phonetics to students taking this course.

◇担当教員：宇都木昭

Akira UTSUGI

◇開講時限：後期火曜 4 限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

音声学は、言語の音声を研究する学問分野です。音声学の下位分野の一つに、音声の音響的特徴を分析する「音響音声学」という分野があります。こんにち、音響音声学的な分析においては、コンピュータ上のソフトウェアを用いることが一般的です。

この授業では、音声学の基礎（主として調音音声学）を前提とし、音響音声学的な分析を行えるような応用力を向上させることを目的とします。なお、具体的な事例として主として日本語と韓国・朝鮮語を扱うことにより、両言語の音声学的特徴への理解を深めることも、あわせて目指していきます。

◇履修条件等：

調音音声学の基礎知識を有していること。基礎が不十分な場合は履修前に参考文献 1（斎藤 2006）を読んでおくこと。韓国・朝鮮語の学習経験は問いません。

◇講義内容：

授業は、実習と発表から構成されます。実習は、コンピュータ上で Praat という音響分析ソフトウェアを用いて行います。発表においては、受講生に論文のレビューをしてもらいます。

この授業で予定している主なトピックは以下の通りです。

- ・音響音声学の基礎
- ・デジタル信号処理の基礎
- ・母音のフォルマント

- ・破裂音と VOT
- ・摩擦音・破擦音
- ・持続時間の測定とセグメンテーション
- ・アクセントとイントネーションと基本周波数 (F0)

◇教科書・参考書等：

教科書は用いず、必要に応じてプリントを配布します。

<参考書>

1. 斎藤純男 (2006) 『日本語音声学入門』(改訂版) 三省堂.
2. P. ラディフォギッド (1999) 『音声学概説』大修館書店.
3. K. Johnson (2011) *Acoustic and Auditory Phonetics* (3rd edition).

Chichester: Wiley-Blackwell.

4. R. ローレンス・G.J. ボーデン・K.S. ハリス 著、廣瀬肇 訳 (2008) 『新ことばの科学入門 第2版』医学書院.

<参考ウェブサイト>

Praat (P. Boersma & F. Weenink): <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>

Praat 入門 (宇都木昭) : <https://sites.google.com/site/utsakr/Home/praat>

◇授業期間中の課題：

学期中に発表をしてもらいます。また、学期中に数回、音響分析の結果についてのレポートを提出してもらいます。

◇成績評価の方法：

発表 (30%)、討論への参加状況 (30%)、レポート (40%) により評価します。

◇注意事項：

授業中の積極的な発言を期待します。

◇オフィスアワー：

水曜 12:10-13:30

◇連絡先：

研究室：全学教育棟北 204

電子メール：utsugi@nagoya-u.jp

◆科目名：

現代中国語表現論演習 b

Studies of Modern Chinese Expressions (seminar) b

◇副題：

中国語学と中国語教育(2)

Chinese Grammar and Chinese Education (2)

◇概要:

本演習では中国語学に関する基礎的理解を深めると同時に、文法研究の方法論を身につけ、それを自身の研究で実践する力を養成する。また、中国語学と中国語教育のインタラクションについて具体的な事例を挙げながら学んでいく。

This course deals with the foundations of Chinese grammar and Chinese education. It also enhances the development of students' skill in making oral presentation.

◇担当教員:

勝川裕子

KATSUKAWA, Yuko

◇開講時限:

後期火曜 4 限

◇教室:

(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい:

(1) 中国語学に関する基礎的理解を深めると同時に、問題設定やアプローチの仕方等、文法研究の方法論を身につけ、それを自身の研究で実践する力を養成する。

(2) 本演習では、研究発表を通して自身の研究内容を論理的且つ効果的に伝える方法を習得すると同時に、学術討論及び質疑応答の経験を積み重ねることによりディベート力を培っていく。

◇履修条件等:

中国語で書かれた論文を題材として扱うため、中国語がある程度理解できること。前期(現代中国語表現論演習 a)から引き続き履修することが望ましい。

◇講義内容:

[概要]

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を反映している。本演習では、中国語母語話者が、空間・時間・数量・否定・可能などに関わる事象をどのように認識し、それがどのように言語化されているかについて、統語的、意味的側面から探っていく。同時に、日本語表現との比較対照を通じて、それぞれの言語内部に見られる種々の現象を有機的に関連付けていきたい。また、中国語教育において、日中対照研究の成果をいかに応用していくかについても併せて考えていく。

[授業方法および計画]

授業前半では中国語文法に関する個別の言語事象を取り上げ、関連する論文を輪読しながら討論する。授業後半では毎回、受講者による研究発表(30分)とそれに対する質疑応答(15分)を行う。発表担当者には、授業で取り上げたテーマ、もしくは中国語・日本語における任意の言語事象を取り上げ、問題点の整理と独自の分析・考察

を発表してもらおう。原書講読の際には、必ず予習をしてくること。また、発表担当者は発表の1週間前までにレジュメを作成し、教員の添削、修正を経た上で発表に臨むこと。

◇教科書・参考書等：

プリントを配布する。その他、取り上げるテーマに関連する個別の参考文献等についても、授業時に随時紹介していく。

中国語文法の体系的把握や文法研究の方法論理解に役立つものとして、以下の文献を通読しておくことが望ましい。

- ① 朱德熙《語法講義》，商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 呂叔湘等著・馬慶株編《語法研究入門》，商務印書館
- ③ 陸儉明《現代漢語語法研究教程》，北京大学出版社

◇授業期間中の課題：

必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

以下の3点に基づき、総合的に評価する。評価項目②③に関しては、特に言語専門の受講者は自身が関心を持つ任意の言語事象を取り上げ、関連付けて分析を深めていくことが望ましい。100点満点として、60点未満はD(不可)、60点以上70点未満はC(可)、70点以上80点未満はB(良)、80点以上はA(優)となる。

- ① 授業(ディスカッション等)への参加度(30%)
- ② 研究発表(30%)
- ③ 学期末のレポート(40%)

◇注意事項：

本演習は受講者の人数、関心等に応じて内容を調整し、演習形式で進めるため、発表・ディスカッションを通じた積極的な参加を期待する。尚、専門分野を問わず、言語に対する強い関心や意欲のある学生の履修は大いに歓迎する。

◇オフィスアワー：

随時対応(事前にアポイントを取るのが望ましい)。

◇連絡先：

yuko-k@lang.nagoya-u.ac.jp

文系総合館 6階 602号室

◆科目名 漢民族文化論 b

Course name: Lecture on Han Nationality's Culture b

◇副題： 『墳』の研究 2

subtitle: Research on *Grave(Fen)* 2

◇概要： 春学期の内容を継続して、引き続き『魯迅全集』第1巻の『墳』を読む。詳細は「漢民族文化論 a」の記述を参照すること。

Abstract: To continue with the content of the spring semester, and continue to read the 1st volume *Grave* of the complete works of luxun. More details please refer to "Han Nationality's Culture a".

◇担当教員： 陳 朝輝

Lecturer: Chen Zhaohui

◇開講時限： 後期 木曜6限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい： 昨年度と同様、本授業の最大の目的・ねらいは、魯迅を軸にして中国近現代文学の鑑賞法または研究法を身に付けて行くことである。但し昨年度と違って、今年度はより原典の解説と鑑賞に時間を振り、短編中編と関係なく、個々の魯迅文学作品の魅力を実感することである。

◇履修条件等： 中国語で書かれた文献資料を読めること。

◇講義内容： 春学期と同様、基本的には学習研究社版の『魯迅全集』(平成元年7月)と人民文学出版社版の『魯迅全集』(2005年11月)所収の『墳』を標準テキストとし、そこに収録してある作品を順番で読んで行くこと。具体的には、

- 1 回目 オリエンテーション
- 2 回目 春末閑談
- 3 回目 灯下漫筆
- 4 回目 雑憶
- 5 回目 「他媽的」について
- 6 回目 眼を開けて見ることについて
- 7 回目 「ひげ」から話は「齒」に落ちる
- 8 回目 堅壁清野主義
- 9 回目 寡婦主義
- 10 回目 「フェアプレイ」急ぐべからず
- 11 回目 『墳』の後に記す
- 12 回目 博士課程在籍者による個人研究発表(時間調整あり)

- 13 回目 博士課程在籍者による個人研究発表（時間調整あり）
- 14 回目 博士課程在籍者による個人研究発表（時間調整あり）
- 15 回目 博士課程在籍者による個人研究発表（時間調整あり）

- ◇教科書・参考書等： 日中両国に出ている各版の「魯迅全集」および選集。
- ◇授業期間中の課題： 自ら進んで、日中両国の各種の雑誌に掲載している『墳』についての研究論文を調べること。
- ◇成績評価の方法： 1. 授業の出席状況；2. 調査発表の質；3. 期末レポート。
- ◇注意事項： 単位が必要でない聴講生も履修者と同様、調査発表を分担すること。
- ◇オフィスアワー： 水曜日午前9：00 ～ 14：00
- ◇連絡先： chen@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：現代中国語表現論 b

Studies of Modern Chinese Usage (b)

◇副題：中国語学の諸問題

Various Issues in Chinese Linguistics

◇概要：

現代中国語におけるある言語事象について、研究テーマとなりうる問題の所在を明らかにするとともに、形式・意味・語用・認知などの側面から、総合的に分析を加えていく。

In this course we will investigate various issues in Chinese language studies. Studying some linguistic phenomena of modern Chinese, we will investigate how the issues in them are defined and analyze them comprehensively from the viewpoints of style, meaning, pragmatics and cognition.

◇担当教員：丸尾誠 Maruo Makoto

◇開講時限：後期月曜 3 限

◇教室：（後日公表する時間割表で確認して下さい）

◇目的・ねらい：

現代中国語における個別の言語事象を理論化していくプロセスを体験することにより、中国語学の基礎を修得するとともに、論理的な思考および応用力を養成することを目的とする。

本講義では、中国語学に関する中国語で書かれた論文（必要に応じて日本語で書かれたものを扱うこともある）の講読を通して、現代中国語における文法研究の方法論を身につけていく。

◇履修条件等：

中国語（“普通話”）の運用能力を有すること。前期（現代中国語表現論 a）から引き続き履修することが望ましい。

◇講義内容：

[概要]

- ①講義時には、一般言語学的な視点をも交えて、現代中国語の文法事項について相対的に論じる。
- ②一般言語学における言語理論が、往々にしてその特異性ばかりが強調されがちである中国語という言語を分析する際にどこまで有用かという問題についても併せて考えていく。
- ③履修の前提として中国語学のみならず、言語学・日本語学・英語学などの知識をある程度有することが望ましい。従って、専門外の学生については、必要に応じて当該事項や概念・用語を調べてくることを別途課題として課すことがある。

[授業方法および計画]

後期も前期同様、論文講読が主となる。日本語に訳していく過程において、適宜用語や概念の解説を行う。講読する論文については、必ず予習をしてくること。

◇教科書・参考書等：

プリントを配布する。学界の動向をも見据えつつ、定期的に刊行される学術雑誌の新しい論文・著書に細心の注意を払い、必要に応じてそれを教材として使用することもある。

取り扱うテーマに関連する個別の専門書・論文等については授業時に適宜紹介するものの、中国語の文法を体系的に理解し、理論を構築していく際の前提となるものとして、以下に挙げるものに常日頃目を通して、文法研究の方法論を把握しておくことが望ましい。

- ① 朱徳熙《語法講義》，商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 朱徳熙《語法答問》，商務印書館（邦訳：『文法のはなし—朱徳熙教授の文法問答—』中川正之・木村英樹編訳，光生館） ※この②については邦訳本の方に訳者による詳しい注釈がついており、参考になるところが大きい。
- ③ 輿水優『中国語の語法の話 —中国語文法概論—』，光生館

◇授業期間中の課題：必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

学期末レポート（80%）および出席・討論への積極的な参加などによる平常点（20%）。レポートを提出しない場合には「欠席」扱いとする。レポートの課題は原則として授業で扱った複数のテーマの中から選択できる形式とし、その中に「自分の興味のある文法事象」について自由に論じるものも入れる予定である。その場合、問題の発掘という点が、とりわけ重要となる。

◇注意事項：特になし。

◇オフィスアワー：

メールでの質問などは常に受け付ける。オフィスアワーは、メールなどにより、個別に設定する。

◇連絡先：maruo@lang.nagoya-u.ac.jp

◆科目名：東アジア言語論演習 b

Studies of East Asian Languages (Seminar) b

◇副題：バルト・スラヴ語アクセント学の諸問題

Problems of Baltic and Slavic accentology

◇概要：

この授業はバルト・スラヴ語のアクセント法の歴史について学ぶ。授業の前半では、バルト・スラヴ語のアクセント法の理論にとっての鍵となるアクセント法則を扱う。後半では、バルト・スラヴ語のアクセント体系と印欧祖語のアクセント体系の関係を扱う。

The aim of this seminar is to introduce the history of Baltic and Slavic accentuation. The course of the first semester deals with some accent laws as the keystone for the theory of Balto-Slavic accentuation. The course of the second semester deals with the relationship between Balto-Slavic accentual systems and the Proto-Indo-European accentual system.

◇担当教員：柳沢民雄

Yanagisawa Tamio

◇開講時限：後期水曜 2 限

◇教室：(後日公表する時間割表で確認して下さい)

◇目的・ねらい：

19 世紀以来、バルト・スラヴ語のアクセント法研究は印欧語学の巨匠達によって行われてきた。それらの研究は、彼らの名前をつけたアクセント法則として知られている：例えば、レスキーンの法則、ソシュールの法則、ヒルトの

法則、等々。バルト・スラヴ語の比較歴史的アクセント論はかなり複雑で分かりにくいテーマであるが、最近は概説書も出版されているので、このテーマへの接近は以前に比べると容易になっている。前期の授業では、基本的なアクセント法則を、オリジナルなテキストを読むことによって、理解することを目標にしている。

◇履修条件等：

特になし。

◇講義内容：

〔概要〕

後期は、バルト・スラヴ語のアクセント体系と印欧祖語のアクセント体系（即ち、サンスクリットとギリシア語、およびゲルマン語から再建されたアクセント体系）の間の関係を考察する。テキストは Garde (1976) と Illich-Svitych (1963)を読みながら、それに関連する文献を読むことにする。授業は以下の順序で読み進める：

1. バルト・スラヴ語の音調の起源

テキスト：

Garde, P. *Histoire de l'accentuation Slave*. I. Paris. 1976.

参考文献：

Fortunatov, Ph. Zur vergleichenden Betonungslehre der lituslavischen Sprachen, *AslPh*, Bd. IV, 1880.

Bezenberger, A. Zum baltischen Vocalismus. *BB*, XVII, 1891.

de Saussure, F. À propos de l'accentuation lituanienne, *MSL*, VIII, 1894, pp. 425-446. (*Recueil des publications scientifiques Ferdinand de Saussure*, Genève, 1921. pp. 490-512.)

Dybo, V. A. Balto-Slavic Accentology and Winter's Law. *Studia Linguarum* 3. 2002. pp. 295-515.

Kurylowicz, J. *L'accentuation des langues indo-européennes*. Wroclaw-Krakow. 1958².

2. バルト・スラヴ語と印欧語における名詞のアクセントパラダイムの関係

テキスト：

Illich-Svitych, V. M. *Imennaja akcentuacija v baltijskom i slavjanskom*. Moskva. 1963.

参考文献

Wheeler, B. *Der Griechische Nominalaccent*. Strassburg. 1885.

Hirt, H. *Indogermanische Grammatik*, Teil V: Der Akzent. Heidelberg. 1929.
Lubotsky, A. M. *The system of nominal accentuation in Sanskrit and proto-Indo-European*. Leiden: Brill. 1988.

◇授業期間中の課題：必要に応じて指示する。

◇成績評価の方法：

履修取り下げ制度を採用する。

評価は口頭発表とレポートを各 50 パーセントとして評価する

◇注意事項：特になし。

◇オフィスアワー：

メールでの質問などは常に受け付ける。オフィスアワーは、メールなどにより、個別に設定する。

◇連絡先：k46413a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp